慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地方経済に就て
Sub Title	
Author	床次, 竹次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.2 (1910. 8) ,p.196(66)- 204(74)
JaLC DOI	10.14991/001.19100800-0066
Abstract	
Notes	講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100800-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中が聖の御代と唱へられ、文化の發達した時代と言はれて居つたかと思ふと、誠に心細い次第であります。尚是等の事に就ては種々述べたいことも ありますが、今日は是で終りに致します。

（史學會大會講演、文責記者にあり）

地方經濟に就て

床次竹次郎

私は長い間地方に居りましてさうして今まだ地方の事に關係して居る者でありますが故に自分の關係した事を些かお話致したいと思ひます。

で近來段々地方財政とか經濟とか云ふ事に就て、世の中で話の起つて來ましたのは誠に私に取つては喜ぶべきことでありますが、私が地方に居ります時分に考へて居りましたには、第一に地方の公共團體の財政第二に農家の經濟、地方の金利、地方農業資金に就てもう少し考へて貰ひたいと思つて居つた。公共團體い事を一口に申しますれば、國の財政が玆十年間に非常に進歩したのと同じく、地方の財政の方も亦進んで參りました、國の貿易が玆數年の間に著しく發達したと同じく、各地方の生産も同じく發達して居るのであります、今日は此地方の歳出入が二億何千萬圓になつて居りますが、地方制度の布かれた時分には僅かに二三千萬圓のものであつたのであります、此當時の地方の團體の仕事と申せば役場の費用とか警察の費用であるとか、若くは小學校の費用であるとかでありますが、段々近來になつて色々の仕事が興つて參つて殊に教育の如きは其當時は僅か小學校の然かも四年の義務教育が今日は六年の教育になり、それから補修教育があり實業學校が興り、或は中學、師範學校等が出來ると云ふやうな事で、其當時に比べると數倍の費用になつて來たが、最も甚だしく増した費用は衛生の費用であります、是は殆んど其時分には衛生と云ふものは何の事であるか分らないのが、今日になりますれば病院が出來るとか、或はペストが流行するから鼠を買ふとか、又隨分此頃であれば東京市内に腸窒扶斯が

流行し猩紅熱がある、此儘ではいかぬ三千萬圓掛けても四千萬圓掛けても、下水を作らねばならぬと云ふやうな有樣になつて來たのであります。それ等は何十倍と云ふ増し方であります、又勧業の費用に於きましても、今日では農事試驗場があるとか山林技師が居るとか或は殖林するとか、又水産試驗場であるとか水産技手が居るとか、織物でありましても色々の施設が出來てをります、さう云ふやうな事で段々費用が殖へて居ります、又た交通の方に於ても、昔の封建時代にはどうであるかと云ふと、國界には險坂峻路がある方が宜かつたのでありますが、それを皆打毀して今日のやうな所まで進めたのでありますが、是は皆な地方の土木費が殖へて來た譯であります、從つて地方の借金も餘程殖へて來ました、つまり初めは何もなかつたものが唯今の所では一億五六千萬圓に上つたと思ひますが、其中の重なる費用は上水道の費用であるとか、道路の建築費であるとか又學校の建築費であるとか云ふやうなものであります、扨て此後の事を考へて見ますると云ふとまだ〳〵それでは止まらないと思ひます、二億何千萬圓と云ふと幾らかえらい、昔に比べて殖へたのでありますけれども、先程御話のありました如く金の點に於ては日本はまだ勿論向ふには及ばない、二億圓と云ふとカーネーギーなりロックフエラーなぞと云ふ人が、公共事業に出した金と匹敵して居るのであります、一人の出した金と同じである、全國中集めての地方費が二億何千萬圓であります、紐育、倫敦と云ふ所には一人で五億も六億も出して居るのでありますから、到底及ばぬ譯でありますが、地方を御覽になりますれば殖へたとは云ふものゝまだ〳〵是から大いに殖えなければ、到底充分な仕事は出來ないのであります、先程も申す如く東京市にした所が下水の問題もありまするし、歩道とか車道とかと云ふものも出來るだらうし、或は並木を植ゑると云ふ議論も起り、アスフアルトを敷くとかコンクリートにするとかと云ふ議論もありませう、それから私は九州に參りましたが

此上水なぞは東京にはありまするけれども田舍に參りますると云ふと、漸く今着手して居るやうな有樣で、又是からやらうと云ふ計畫をして居る所もあるのでありますから、況や下水なぞをやつて居る所は少しもございませぬ、のみならず此地方團體が牧益事業をやると云ふことは議論もあることでございますが、兎に角やるやうになるだらうと思ひます、東京市でも電鐵を市營にしやうと云ふ話があつて、大分面倒な事でございましたが必ず又是は起つて來る問題であらうと思ひますが、或は此瓦斯を市營にするとか電燈を市營にするとかと云ふやうな事も、必らず起つて來やうと思ふのであります、もう一歩進めて輕便の交通機關を公共團體でやれと云ふ議論も起つて來やうと思ふのであります、地方の借金の模樣を見ても中々澤山の借金を致して居りますが、其借金の中の過半はさう云ふやうな事業に使つて居る、餘程今後の事を考へて見れば今日までのまだ以上に借金もしなければならぬ、又金も掛る事であらうと思ひますが、私は或書物を見た時に獨逸の工業の發達した原因……外にも幾つもありませうが公共團體で、電燈なり瓦斯なり電鐵なりと云ふ風な牧益事業を經營したのが一種の原因であらう、今申すやうな事業は經營は容易くて、牧益は比較的確かな事業であるやうに考へますが、さう云ふやうな事業を總て公共團體でやる爲に、普通の資本家は勢ひ他の有益な事業を見つけて投資をしなければならぬ、それだに依つて遂に外の工業に着手する者が多くなる、是が獨逸の工業の盛んになつた一つの原因になるであらうと云ふ話でありますが、是は一理窟であらうと思ふ、況や又自分で償還して行き得る所の事業であるならば、先程御話のありました如く借金だからと云ふて、必しも恐るるに及ぶまいと思ふのであります、生産的事業であれば借金の多い程名譽であると云ふ話でありますが、さう云ふ事もあらうと思ひます、それで將來の事を考へるとどうしても地方の財政上に便利を與へることを計らなければなるまいかと思ふのであります、で政府に於ては此頃は郵便資金の中から公共團體の爲に、低利資金を供給すると云ふ運びになつて居るのでございますが、是は誠に結構な事であります、併し將來の事を考へると唯今位の事では中々追付くまいと思ふ、まだそれ以上の方法を講じなければならぬかと思ふ、外國の例を申上げれば獨逸あたりでは公共團體が自ら貯金事業を扱つて居る、さうして此金を以て自分等の事業の資金に廻はして居る、白耳義であれば町村が株主のやうにして町村自治の勤功を誓つて居る、英吉利であれば國は信用を以て公共團體の爲に代つて借金をして、さうして其資金を作ると云ふ道も開けて居ります、是は何れ日本に於ても將來さうあるべき事であらうと思ひます、それから個人の經濟の事を申上げれば、常に私は地方に居つて遺憾に思ふた事はもう少し此金利が安くなつたならば、餘程地方の事業が發達するであらうと云ふ事を感じたのであります、排水事業なり用水の事なり、又殖林の事なり開墾の事なり、又小工業の事なり、金利がもう少し安くなれば之に促されて興るべき所の仕事が餘程澤山あるのであります、今日の所を申上げますると地方の金利は中々高いのでありまして、農工銀行あたりで貸すのでも八朱から九朱の利でありまして、個人同志の融通して居るのであると先づ一割五分から二割で、此間なぞは福島地方を廻つて來た人の話を聞くと、三割も出して居ると云ふのがありますが、是は最もひどい例でありますけれども、一割五分二割の金利を拂つて居るのがあります、さう云ふやうな高い利を拂つて事業を興して行くと云ふ事は殆んど私は考へられぬ事柄であらうと思ひます、先づ一割五分二割の利子を拂つて尙其上に利益のある事業と云ふものは、餘程の事でなければあるまいかと思ふ、日本の地方の事業を興し國力を增すと云ふには、もう少し金利を下げなければなるまいと思ふ、日本全體に亘つて金利を下げると云ふ事は、私なぞの如き理財に暗い者は分りませぬから、宜しく是は諸君なり又理財當局者の御方に

願はなければ分らぬ事でありますが、兎に角私は地方に居つた一員として、もう少し此全體の金利が安くなる工夫はないものであるかと云ふ考へを有つて居るのでありまして、さう致しまして現に其金利の高い爲であらうと思ふて居ります事は、日本は農を以て立つて居ると言ひますが農民が減じつゝある傾きがあるのでありまして、日本の農家の中で土地の三町歩位若しくはそれ以下の所有者と云ふものは、全體の農家の中の七分若くは八分を占めて居りますが、此小さな農家が農務局の統計等に依つて調べて見ますると云ふと、漸次減少して居る、さうして總て此土地を離れた農家が增して來る傾がある、で或老農の話を聞いて來た事でありますが、或村の如きは殆んど農家にして借金のないものはない、さうして今日農家の最も苦しむ所は租稅の重いと云ふよりも、寧ろ此高利の爲に苦しめられて身代限りをするものが多いのであると云ふ事を聞きましたが、今申す統計に現はれて居る所の農家の數の減少する事は確かに私は今の高利が一つの原因であらうと思ふのであります。

尙之れを世界の大勢から申しますると、農民が都會に集中すると云ふ事は何處の國でもある事であるが、何れの國と雖も元は農が多かつたに相違ないと思ひます、近來英吉利あたりでは農家と他の職業に從事して居る者の比例は、どうなるかと云ふと四分六分になつて居ります、卽ち四分通りは農家になつて居ります、亞米利加もさう云ふ事である、獨逸は稍それと比例を異にいたして居りますけれども、先づ半々位ゐまでになつて居ると云ふ事でありまして、で日本は唯今の所では八分二分位であると思ひます、若しくは七分三分で農家の方が多いのでありますが、併し是は底到人口の增加に伴ひ又工業の發達に伴ひ、或は今申すやうな原因よりして此比例の變更致す事は、是は止むを得ぬ事柄であらうと私は考へます、到底此やうな比例を維持する事は出來ない、必ず農家以外の戶數の殖えるものであると云ふ事は致方がない事と

考へますが、併ながら兎に角農業家の爲に便利を計つて出來るだけ其總體の戶數の減らないやうにすると云ふ事は、必要であるまいか、國の元氣は農民にあると私は考へて居る、堅實なる氣風を有つて居るのは農民に限る、健全なる體格を有つて居るのも亦農民に限る、身體が虛弱になり從つて思想も浮薄になるのは、都會に住する人であらうと思ふ、さう致しますれば國民の元氣を大體に維持するには、どうしても農家に重きを置かなければならぬかと思ふのでありまして、近來では國情は違ふのでありますが亞米利加あたりでは何とか云ふ鐵道會社長あたりは、彼の國の農業の衰退を非常に憂へて話をして居る、どうも今のやうな趨勢で往けば終に亞米利加は穀物を輸出する國でなくして、終に輸入する國になりはせぬか、さうなれば終に亞米利加衰亡の時であると云ふ事を云ふて居る、又英吉利に就て見ても、あゝ云ふ工業國であつて、農家の事はどうであるかと申しますと、矢張り此小さな土地を買つて小農者を作ると云ふ事に就ては、保護政策を採つて居るのであります、獨逸は勿論さう云ふ考である、是はどうも止むを得ない趨勢であるけれども、一國の元氣を維持し一國の食糧品の問題の上から云ふても、餘程考へなければならぬ事柄であらうと思ひます、日本では貧民の割合に少いのと英吉利あたりで商業上の景氣の浮沈に依つて、無職業者が夥しく徘徊するのとは他の原因もありませうけれども、農業に重きを置いて居るのと置かぬのとの差は確かに原因であらうと思ひます、で是は止むを得ぬ趨勢とは言ひながら、是は豫防の出來る限り豫防するのが適當なる政策であるまいかと思ひます、然るに今日まで地方の經濟に就て機關を設けられてありますのは、御承知の如く勸業銀行と農工銀行とでありまして、其外にはないのでありまして、で此農工銀行等がどれだけ働いて居るかと申しますれば、今は違ひましたらうが曩に私が調べた時分には、貸出し總額七千何百萬圓で八千萬圓位な事でありました、さうして其貸出しの一口に就てどれだけ

の高であるかと云ふと、勸業銀行の方は三四千圓でありまして、農工銀行の方は一口四五百圓であります、さうして先にも申す如く小さな農家の資金と云ふものはどうかと云ふと、一番少ないのが十圓以上多くて數十圓の資金を要する所が最も多いと考へる、さう致しますると今此日本の農家と云ふものは、折角立つて居る所の農工銀行の一向恩惠を受けて居らぬと云ふ事であると思ひます、是が世の中でも非難のある點と考へますが、尤も農工銀行の出來た時分に產業組合と云ふものは未だ發達して居らなかつたのでありますから、自ら此農工銀行とさう云ふ小さな農商工業家とは連絡を取る事は出來なかつたと想ひますけれども、昨年の議會で產業組合との連絡を餘程容易くせられたのは、至極適當な事であると思ひます、どうか此產業組合が充分發達致し、又農工銀行の資金が充分に其方に廻はると云ふ事になつたならば、先程申すやうな事は豫防が出來はしないかと思ふ、唯今の所で日本の產業組合員は數が五六千であります、獨逸の事を聞いて見ますると二萬五六千あると云ふ事で、人口十五人に就て一人は其會員であると云ふ事です、又英吉利は人口の二十分の一は其會員であると云ふ事でありますが、まだ日本では漸く五六千の事でありますから大いに此方面に向つては、將來力を盡すべき事があらうと思ひます、扨て農工銀行の方から資金の融通と云ふ事に就ては、先程申上げるが如く勸業銀行と合せて漸く七千萬圓であるのですが、もう少し地方の經濟に御注意になる御方はどうか一つ尙より多くの資金を供給をして貰ひたいと云ふのが、地方に居つての私の希望であります、是も此頃に至つて郵便資金を幾分か廻はされる事になつて居りますが、畢竟政府の財政の基礎がもう少し固まらなければ、どうしても仕方がない其時を俟つより外はあるまいと思ひます、けれども兎に角此產業組合なり又農工銀行の資金を潤澤にすると云ふ事は地方に集めて地方に散ずると云ふ策で一番宜からうと思ふが、まだ其運びには至らぬのであります、伊

太利が近來大に勃興したのは全く此中央に集めた金を更に地方に散じて、相互の運轉を好くした結果であると云ふ事を聞いて居ります、或佛蘭西の學者がそれを評して伊太利は誠に資金の收集、利用の關係が宜しい、然るに佛蘭西に於ては地方で集めた金を中央に總て纏めて、さうしてそれを國債の穴埋めにする、それは誠に地方に於て生活に必要な資金を取つて來て、さうして中央の事に使ふのであるから、地方の事はどうでも疲弊しなければならぬのである、斯う云ふ議論をして居りますが、日本に於ても何れ政府の財政が確立いたしました以上には、さう云ふ事にしたいものであると云ふ希望を有つて居る次第でありますが、尙もう一つの個條は是も此頃世間で段々議論があるやうでありますが、不動產の爲に便宜の道を開くと云ふ事であります、私は利害得失は能く存じませぬが、兎に角地方に在つて考へて見ると云ふと何にか便利を計られたら良からうと思ふてをります。

勸業銀行農工銀行の設立されましたのは、二十三四年の頃であつたと思ひますが、其時分には當時の負債は三億圓ばかりであつた、今日私は統計を持つて來ませぬからどの位あるか存じませぬが、恐らく五億六億の負債があるであらうと思ひます、裁判所の土地抵當の件數から調べて見て必ず其位あると思ふ、年々二億かそこらの抵當はあるのであります、さうして此日本の土地の價格は假りに地價の五倍位の直段があるものといたしますれば、七八十億圓の價格はあるのであります、其財產に對して今勸業銀行から支出して居る金は總體それに廻つて居ると見ても、僅か七千萬圓か八千萬圓しかないのであります、多くのものはさう云ふ銀行とか個人とかの貸借に依つて土地の融通は行はれて居ると思ひますが、土地の融通をいたしまするにはどうしても長期であり且又低利でなければ、充分いくまいと思ふのであります、然るに其特別機關がないのでありますから、今日は矢張り短期でやつて居るのであらうと思ひます、從つ

て利子も高いと思はなければならんのであります此澤山の土地を長期に且つ低利に運用の出來るやうにすると云ふ事は農業の重もなる吾國といたしましては極く必要な事ではないかと思ひます、此事に就ては近來議論が起つて居るやうでありますが、至極結構な事と思ひます、どうか諸君に於かれても御攻究あらん事を希望する次第であります、或は資金を投ずるとか或はさう云ふやうなものを立てたならば、人が却つて贅澤になつて無用な借金をしはしないかと云ふやうな議論も段々あるやうでありますけれども、是はつまり銀行家の働が宜しきを得たならば、私は心配のない事でないかと思ふのであります、誠に田舍の問題で先に申した如く貴方がたのやうな都の人の御耳には這入らぬ事と思ひますけれども、兎に角日本の大多數は農民でありますず、放つて置いても此農民と他の職業の人の比例は變つて來るのでありますが、今のやうな八分二分、七分三分と云ふ比例は保つ事は出來ないと考へます、さう致しますると農民の數が少くなつて遂に地主が少くなつて、小作人が殖へる、小作人が殖へれば農業の改良が出來なくなる、さう云ふやうな事では結局國の將來の爲に宜しくない事であると思ひますから、田舍議論でありますけれども、御聽きを願つて御攻究を願ひたいと思ふ次第であります

（理財學會大會講演、文責記者にあり）

雜錄

歐文史籍便覽

田中萃一郎

如何なる書を讀む可きかとは抑も枝葉の問題にして何人も如何に書を讀む可きかと云へる根本の問題に思を致さゞる可からざることは事新しく云ふ迄もなし、然れども既に一わたり讀書の心得ある人々に向ては良書の書目も亦參考に供せらる可く就中汗牛充棟啻ならざる歐文史籍に就き、その眉目と推さるゝものを擧ぐるも必ずしも無用の業にあらざる可し。但しこの稿は一九〇六年より七年に亘れる冬季の學期に於て、ライプチヒ大學史學教授ブランデンブルグ先生の史學序論講義に於て、教示せられたる所に基けるものなれば獨文の書籍に詳しくして他は簡略に過ぐるの嫌なきにあらず、且又英佛文の書籍は余の增補せるもの多ければ、この選擇も亦自から杜撰なるものあらんこれ余の責任を負はざる所なり。而して大體に於てはブランブルヒ先生の區別に從て史籍を大別して傑作、名著、參考書の三種に分つこと左の如し。

第一　傑作

Leopold von Ranke: Die römischen Päpste in den letzten vier Jahrdhunderten.

The History of the Popes. 3 vols. [Bohn's Libraries] 10 s. 6d.

——: Deutsche Geschichte in Zeitalter der Reformation.

——: Französische Geschichte vornehmlich im 16. und 17. Jahrhundert.

——: Englische Geschichte vornehmlich im 17. Jahrhundert. (A History of England, principally in the Seventeenth Century. 6 vols. 3g.)

——: Ursprung und Beginn der Revolutionskniege 1791 und 1792.

——: Geschichte Wallensteins.